

つたものは死後は必ず前夫のもとに至つて現世同様の生活をする、だから夫の死後はよしやその子に婚するものとして一旦死んでしまへばまたもとの夫のところへ歸するのであるとの信念は、此風俗のよつて來る大動機であるので、ルブルキーの蒙古人から聞いて傳ふるところを見るとよく這般の消息を解することが出来る、また蒙古では王が死んだ後でも行宮は少しも生中に殊ならない、元史を見ると「太宗四年十二月、如太祖行宮」、と記し、元史類編は之れに註して後累朝皆有行宮、各衛士給事如在位時といふて居る、これらのことは皆人間の死がその最後でなく、何處かに生を續けて現在營みつゝあるのと同様の生活をして居るものであると云ふ、彼等の信念を現らはすといふに、他界といふものも天か地か山か、谷かともかく彼等の目撃する現世界以外ならずして此等死者の存在する世界があると云ふ觀念の存したのを彷彿の間に認むる事を得るの實例であらうと思ふ、之を我國の古史に見ゆる夜見の國（黃泉）などの觀念と比較して見たならば少からぬ興味の存することであらうと思ふ、獨りこればかりではない、上述諸種事實及び後に述べんとすることどもも、同様の研究を施こして見るならば決して無益なことでもあるまい。

尙ほすゝみて、これら諸種のことをのべ、更に生死冠婚乃至軍國の大事に至る迄一として關與せざるなき巫人即ち現今シャマン（滿洲語）と云ふものゝことに及ぼうと思ふ。

前回蒙古族の風俗習慣中で、少くとも彼等の信仰に關係ありと認めたものゝ大概を拾つたつもりである、まだまだのべて見たいこともあるし、研究の價值のあると思ふことも少くないがこれ位にして止めようと思ふ、要するに彼等の文明は所謂物象崇拜時代なる、極めて幼稚なる程度にあつたのである、さてかゝる觀念一つの社會現象と